

を家庭内における先祖祭祀空間と捉え、人々にとって仏壇とはどういうものであるのか、日本人の先祖に対する意識はどのようなものなのかについて調べるとともに、現代人の先祖観を表象する仏壇というものを明らかにしていくものである。

日本人にとって先祖とは、常に人々を見守り守護する存在であった。古くは農耕神的位置づけであったが、やがて代々続いていく「家」の象徴的存在として祀られるようになり、その祭祀の場は仏教によって仏壇となった。人々は「家」を継続させ、発展させ、自らも先祖となるために仏壇と相対し、先祖を祀ってきた。

しかし時代は変わり「家」は無くなった。家制度や家族構成の変化によって、先祖は義務的・規範的な祭祀の対象から、私的な愛情表現の対象へと変化した。このような先祖観の変化と、老人のいない核家族世帯の増加によって、仏壇に対する人々の意識も仏壇自体も変化した。仏壇とは、本来は仏像を安置するための場所である。しかし檀家制度とともに広まった仏壇は、仏像よりも位牌を主とする祭祀空間になってしまった。仏壇は、先祖祭祀の装置として受け継がれてきた。しかし人々にとっての先祖は、私的な愛情表現の対象へと変化した。仏壇は墓よりも私的な要素が強いため個人の感情が入り込みやすく、人々は各自が気持ちのむくまに故人を祀り、触れ、語りかけるようになった。先祖祭祀も個人主義になったのである。しかし人と人との繋がりがある限り、伝統的な形態の仏壇というものは失われても、何らかの形で先祖祭祀は行われていくと思われる。

#### アートによる地域おこしの可能性

三枝 直子

なぜ、観光地にはその土地に関係のない美術館が多く存在しているのだろう。私の出身

地の近くにある観光地・河口湖にも当地に全く縁のなさそうな美術館が立ち並んでいるのに気がつく、それらに対して違和感を感じずにはいられなかった。

その体験がきっかけとなり、富士河口湖町の観光行政について調べ進めてみたところ「五感文化構想」という計画にたどり着いた。これは嗅覚・味覚・視覚・聴覚・触覚に訴えて刺激することで住民の感性を高め、さらにこれを基盤に観光地作りを行うことで財政も潤そうという内容である。このような美術館による地域おこしは、全国でも同様に行われているのだろうか。それならば筆者の感じた違和感を、現地住民も感じているのではないか。以上のような動機・目的に基づき、本研究を進めた。

対象としてマスコミへの露出度が比較的高い、新潟県越後妻有地域「越後妻有アートネックレス整備事業」、香川県直島町「ベネッセアートサイト直島」、石川県金沢市「広坂芸術街構想」を選定し、山梨県富士河口湖町「五感文化構想」と比較・考察を行った。その結果、現在美術館とアートが直面している課題が浮き彫りになってきた。主なものとして、越後妻有の事例では県の取り組みとして始まった事業が企業介入によって規模拡大が進んでいた。直島町では、ベネッセコーポレーションのメセナ活動の一環として使用されている観光地における住民とアートとの乖離という現状がある。金沢市の金沢 21 世紀美術館では、集客重視のビジネスと化している美術館経営などが挙げられる。

地域おこしの‘成功’とは経済効果や来客数の増加でなく、より地域住民の目線を重視したアートによる地域住民活性化の状態を指すのではないだろうか。そのために各地域で様々な取り組みがなされていることもわかったが、上記のような問題点も多い。しかし、アートによる地域おこしは着手されてから結果が出るまで時間を要するものである。これ

らの取り組みが始まったことは注目すべき事態であり、これからもその動向に注目していく必要があると感じた。

屋内型ウォーターパークという空間：  
その形成と機能変遷

白池 円

コミュニティ FM が作るコミュニティ：  
FM 西東京とむさしの FM を事例に

谷口 瑠里子

コミュニティ FM は、市区町村単位で放送をするローカルラジオである。市民参加型メディアとして街づくりの面から、また、近年の防災意識の高まりと共に注目され、その開局数は全国で 200 局を超える。

旧郵政省による当初の制度化の目的の 1 つは、地域社会再生の役割を担うことであった。地域情報発信のツールとしてだけでなく、地域コミュニティの形成・強化が期待されているのである。東京の住宅地で、近所付き合いを知らずに育った筆者にとって、地域をキーワードに人をつなぐ可能性の模索は非常に興味深い。普段からラジオのヘビーリスナーであることもあり、コミュニティ FM をテーマに選んだ。

本稿では、コミュニティ FM が作り出すコミュニティがどのようなものなのかという問題意識のもと、都市におけるコミュニティの姿を考察し、現状でコミュニティ FM が、都市社会の構成メンバーとどのような関係を築いているかを明らかにした。「地域」をキーワードに人がつながることが珍しくなった都市社会において、コミュニティ FM は、地域コミュニティを作り、強化していることがわかった。

コミュニティ形成における課題としては、コミュニティが限定的であることがあげられ

る。現状では、コミュニティ FM とつながりを持っているのは地域の諸団体であり、リスナーや過去の出演者とのつながりは作れていない。

今後、コミュニティ FM は、経営安定の工夫をしながら、より充実した放送を目指し、地域の人々とコミュニケーションを取ることで、個人の中に「地域を知る→興味を持つ→コミュニティ FM に参加する」という循環を作る努力が望まれる。地域コミュニティ再生の旗手として、大いに期待したい。

過疎山村における集落機能の「限界化」による住民生活への影響に関する考察：  
東京都檜原村中組地区を事例として

新沼 星織

近年、都市部においても高齢化による問題が深刻化している。しかしそれらは高度経済成長期以降継続して人口減少が見られた山間地域においては、先行現象として常態化している問題であり、既に自然減による集落消滅、地域衰退を経験している。過疎化プロセスや集落消滅メカニズムを考察した研究からは、人口の小規模性により消滅が危惧される「限界集落」が定義された。その後、大規模センサスの分析からそれに当たる集落の割り出しに力が注がれ、特に自然資源管理機能が衰退することを危惧して集落消滅の問題が議論された。農林業関係者に主導されたこれらの議論には、当集落に住む住民の生活に対する視点が希薄であり、常に生活続行に否定的な議論に収斂する点が問題である。本稿は第一に、限界集落住民の生活実態を把握すること、第二に集落機能と住民生活の相互関係を明らかにすること、第三に対限界集落の具体策を検討することを目的とし、東京都下の過疎山村、檜原村の中組地区を対象に、生活行動調査を行った。そして明らかになったのは、道役や祭事などの集落機能は地区内在住者のみでの